

からであろう、日本人の鑑と言いたい。

引揚げれば、直ちに、ブラザー工業(株)に採用され、定年まで在職し家庭円満に恵まれている。現に引揚更生会の面倒な業務に精進して引揚者の方々から絶大な信頼をうけている。

今後、益々の健闘を祈る。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助

戦後モンゴルに抑留されて

岩手県 阿部 有 藏

シベリア鉄道を走る

昭和二十年十一月二十六日、満州国黒河からソ連領に入り、ブラゴエ駅で貨車に乗せられ、行先はわからず列車は走り出した。駅員は男の駅員より女の駅員が多かった。男はたぶん戦争に出て、女がそうした職についたのであろう。

日本の場合もそうであつたらう。駅に停車するたびに、ロシア人の子供等が何か私達から所持品を取ろうとしてよって来ては、何かと言って雑のうなどに手を入れてゆく状態だった。

シベリアの寒さはきびしかった。列車は、水と石炭の補給以外には停車することなくどんどん走った。何日か走ったか、手帳に記入した日だと一週間は走った。もう日本に帰れるのぞみはない。それどころか、埋もれて人生の終止符になるような予感をいだいた。列車はどんどん走り続ける。駅と駅との距離は約二十キロもあるのだ。十二月九日午前四時ごろ列車は止った。

終着駅モンゴルへ第一歩

だれかがウラジオストックに行くなんて言っていたが、着いた所は、外蒙(モンゴル)国境ナウスキ駅であつた。仮の天幕小屋で雪も積もっており、また寒さも零下二十度はあつたらう。約三時間ぐらいのうちに飯盒一杯に食糧をもらう。ここまで持つて来た身のまわりのもので、自分で背負って歩いて歩ける程度にして、あとのものはここにすてるとのこと。

なぜだろうと聞いたところ、この先は歩いてモンゴルにつれて行かれるから、歩けなくならないように身軽にとのようだった。

いよいよ雪の広野を寒さに耐えて歩くのだった。入隊当時の行軍とは全く別で、行き先もわからぬまま殺気に満ちた行軍だ。一応背のうには、寒さに耐える防寒用被服、防寒具は勿論、着がえ、毛布、そしてもしもの時のため白米等も詰めたが、五十キロぐらいいは全員が持った。いよいよ出発は午前九時頃だろうか。朝飯と昼飯は一応すましたようだったが、歩きだして三時間もすると、背のうの中から何か取り出しなげ出し始めた兵隊もでてきた。それは重い背のうの荷物が肩にこいついてくる。どこまで歩くかわからないのだから、重いものはなげて身軽にするのだ。そんな状況で、モンゴルの酷寒の広野を長蛇の列をつくり歩き進む。冬の日の夕暮は早く、寒さが一段と加わってくる。足が棒みたいになる。肩にめりこみ感覚がなくなる。空腹になり、雪の広野の中をどことも知れず歩かなければならなかった。あとで誰かが行先は、スフバートル

と言っていた。

スフバートルへ

スフバートルに向け、歩けども歩けども重みと足の疲れは身にしみ、また寒さも加わり、歩いているうちにバツタリ倒れる者、それつきり息をひきとる。そうした兵隊も何人か出たが、それはそれであとでまともられて雪の中に埋めるほかなかった。

真夜中午後十一時か十二時頃、ようやく目的地のスフバートル収容所に着いたがそこはバラック建ての小屋だった。背負った背のうまたはリュックをおろして、朝準備した飯盒の飯をロウソクをたよりに食べるが、飯は凍りついていた。食い終ったら寝ることだが、何一つとして暖をとるものもなく、食い終った者から寝場所を探してゴロリ、ゴロリと寝るのだが、バラック小屋建ての収容所はせまい。朝目がさめたら、人の上に人が毛布をかぶって三重ぐらいかさなり合って寝ていたようだったが、よく熟睡できた。

翌朝、一応各小隊ごとに居場所が決められた。早速寒さに備えて暖の準備をすることになるが何も無い。

見つけたものは空カン（石油カン）だ。収容所から約二キロぐらいはなれた所に川があった。川は凍りついて雪の野原のような感じでもあった。そこには手の指ぐらいの太さの柳の木とササみたいなのがあつちこつちに生えていたので、それを採って来て空カンの中で燃やして残り炭火をつくり、炬燵のようにして暖をとることにした。その薪採りは時間と場所を決められ、モンゴル兵の歩哨の誘導で五人か十人ずつ出て採るようになり、夜の寒さに備えた。

その炭火をつくるとき飯盒で飯を炊く、一日一食だ。各人が持っている米を炊いて食べた。一人白米は二升ぐらいは持っていたようだ。

収容所は仮のような感じで正規の食糧はこないようだった。ここでこうして、いつどこで何をさせられるか、誰一人としてわかる者はいなかった。ただただ先行きの不安がつのるばかりだった。しかし、若き生命と体力だけが何よりのたよりであった。

凍傷になる

何日かして労働命令があり、羊毛工場に毎回何人か

ひっぱり出された、工場の作業は羊毛の選別と袋詰め。寒さがきびしいから、よく羊毛を軍服の内側にかくし入れて帰り、腹巻き等をつくり寒さをしのいだものだ。勿論工場行きは交代で行くから、残った兵隊は例の薪採りに行くのが日課となった。そうしたある日、順番があたり河原に出かけた。その日は晴れた日で、雪を飯盒に入れて炬燵の残り火で水をつくり、何日かぶりですその水で顔、手、足をふき洗っていたところに、薪採り集合がかかり、早速完全防寒具をつけたが、靴は防寒用は工場に行く者にかしたから、普通の軍靴をはいて出た。外気は零下二十度はあつたらう。だから坂を下りたころ、足の指先の感覚がなくなった。いくら走り回っても、足踏みをしてもだめだ。先ず一把採り終えて帰舍した。その時は何でもなかった。採った薪を一定の長さに折り揃えなくては、炬燵用のカンには入らない。折り揃えて束ねてくくって蓄える。こうしてその日の分に早速火をつけて燃やし始める。くすぶりながら燃え終って出来る炭火は、ほんの少ししかできない。

丁度その日は昭和二十一年の正月だったようだ。貴重品で残しておいた鮭罐を出して鮭飯を飯盒で炊いて、うまくいった故郷の料理を自慢して食べあったのも、

明日がない身であったからだ。冬の日は早く暮れる。

外は暗くなる。そうして食べ終ると、防寒外套に防寒帽をつけて勿論靴もはいて寝るのだ。ところが、いくらか人と人の温度と炬燵の炭火の暖さで足がぬくもった感じになった時である。右足の中指が痛くなった。暗がり起きて靴を脱いで手さぐりで見たら、指先が大きくふくらんでいる。「アッこれは凍傷だ」でも何も薬はない。翌日になって痛みがだんだんでくる。そんな日が続いてきたが、やがて移動命令が出た。

行先はよく聞かされないが、大型トラックに乗せられて雪の広野を走り出した、そのころから足の指の痛みがひどくなり、靴（防寒靴）を脱いで見たら爪がべっとりぬけて指先がなくなり、だからだと靴下についてくるがどうにもならない。そのまま靴下をはいてないと、別の指まで凍傷になりかねないからそのままだが、神の助けか一か月ぐらいで、なんとか指の形で爪

が骨のようにかたくなめにはえて指先が丸くなったが歩くにも不自由だった。

ホジルボラン着く

大型トラックで運ばれて着いた所は、モンゴルの首都ウランバートル近郊の煉瓦工場のある収容所だった。建ち並ぶ半地下式の丸太材を組み合せた兵舎だった。あとで聞いた話だが、その兵舎は、日本軍抑留者のわれわれより先に、ドイツ軍の抑留者を入れた収容所の兵舎とのことだった。その証拠に、ドイツ軍の着用した軍服らしい一部が、兵舎のそばにぼろぼろになって捨てられていたのがあとで発見された。ホジルボランには、仮りの病院もあり、右足指の凍傷も一回治療を受け、今は爪は右斜めに生えている。

零下四十度はある。ここで、ふた冬にわたる強制労働が待っているとは、神ならぬ身の知るよしもなかった。

ホジルボランは地理がよくわからないがモンゴルのほぼ中央のウランバートルの周辺に位置している、始めに着いた、モンゴルとソ連国境から七、八百キロぐ

らしいの距離ではないかと想像された。

ここに着いて、スフバートルで班長をした、兵庫県出身で、当時陸軍伍長のK氏とは、よく気心があい、話し合ったものだ。その班長は、ひどく痔を病んでいた。空缶の炬燵に小さな石を入れて焼き、それを布切りに包み、患部に当てていたが、夜もろくろく眠れないとのことだった。薬もなく、寒さと疲労で、おそろく体力を消耗し切ったことであろう。途中で編成替えが何度かあり、別れたが、幸運を祈るのみである。

ホジルボランも、一面銀世界だ。モンゴルの警備兵は、寒さを防ぐため、外套を二着、靴も二足、手袋も二双着装して我々の監視に当たっている。あなたの兵舎からのそり、のそりと歩く姿は、正に熊が鉄砲をかっついている図である。着るものは、すべて毛皮が用いられているからだ。

それが、零下四〜五十度の中を、三時間も巡回しているのだから恐れ入る。勿論、防寒具も違うが、生来寒さに耐え慣れ、鍛えられたからであろう。

私も、若くして満州のハルピンで、かなり寒さには

鍛えたつもりであった。それがスフバートルにおいて、装備は普通の軍装を用い、僅か一時間ぐらいで凍傷にやられた。モンゴルのこの寒さは、筆舌では到底表わせないものがあつた。半地下兵舎の収容所は、スフバートルのバラック兵舎に比べてかなりましだが、それでも半地下の穴倉は日中でも薄暗く冷える。勿論火の気があるはずはない。寝場所はそれぞれ割当てられ、個人、個人が持ち合わせの毛布を敷いて、その上に足腰を毛布でくるみ、自分の体温で自分だけの暖をとる。そうした日々の連続であつた。今思えば、よくぞあの寒さに耐え得たものと我れながら感心している。

食事は、一日二食だったり、三食だったり。多分モンゴルに、日本軍の捕虜が何万人と入ったことにより、食糧事情が悪くなつてきたのだと思う。

厳冬下食糧が制限される

食糧も不足し制限されてきた。この地の土地がらを見て、農作物の生産はたいしたことはなく、ソ連からの輸入で賄っているものと推察された。厳冬と、人口の増加したことが原因と考えられた。

朝は午前十時頃、小ピン（日本のゴマセンペイぐらいのもの）一枚、昼食は、黒パンを十人に一こと、砂糖小さじ一杯、夜は、大豆（満州から持ってきたものと思う。）でおカユを作り、大きじ一杯半ぐらいであった。労働作業がないときはまだしも、大の男が空き腹をかかえて、一日中ひもじい思いをし、何を考えているか、およそ想像されると思う。私のところでは、春にアンコの一杯入った草餅、いや私の所は黒砂糖が名産で、黒砂糖入りのダンゴとか、いつも食うものの話が落ちになるのだった。

食事後タバコなども欲しくなる。うまく工面してくる者もいる。手つとり早いのは、兵舎の丸太柱を小刀で削り紙巻きにしたり、中国の固型茶を砕いて紙巻きにして代用したり、「タバコらしい味がしないな。」などと言いながら、それぞれ工夫して吸っていた。

寝ては夢に

今日の故郷いかに

さすらいの旅ぞ続けるは

捕われの我が身なれば。

医務室で凍傷を治療

収容所にも、このほど薬療班が開設、非常用の薬品を出し合い、衛生兵によって治療が開始された。私は、スフバートルで右足薬指を凍傷したのが、そのあと治りもせず、ぐちゃぐちゃして、靴下も絶えず濡れて困っていた、二月十日ころ、その医務室で治療を受けた。それは、ヨードチンキを一回付けてもらったのが最初であり最後の治療だった。

我々はまだ旧陸軍の階級によって編成統制されていた。

その編成は、第十二大隊から第十四大隊までであった。第十二大隊はすでに他へ移動し、二月十八日第十三大隊もどこかに移動させられた。私達第十四大隊のみ残り、毎日何することなく過ぎた。二月二十日頃から、モンゴルの軍属が、兵舎に頻繁に出入りするようになった。

ある者は「内地への帰りのことだ。」などとデマを飛ばす者もいたが、その気配すらなく、一縷の望みをいだいているだけに、落胆も大きい。

やがて、何人かが労役にかり出されるようになってきた。穴倉生活から、寒くても外に出て歩けば気も晴れるが、やはり穴倉で身体を休め、体力をつけていた方がよかった。

三月の声を聞くと、ホジルボランにも、陽の当る部分の雪が幾分消えるような気配が見えた。

シラミの凍死捕殺

地下の収容所建物内でシラミがわき、一面に蔓延した。シラミは、ここに移動する以前にすでに発生していたのである。

栄養失調の身をシラミにくわれたら死ぬばかりだ、それは一匹二匹だと手でもつてもよいが、そのときは着ているもの、そして寝るときの毛布までシラミだらけだ。殺虫剤など有るわけがない、では手でもとるか、一日とってもフンドシにいるものの半分ぐらいだ、第一洗濯ができない。

そこで考え出したのが「冷凍捕殺法」である。さすがのシラミも、零下三十度四十度の雪の上に二晩もさらすとお陀仏である。

シラミは着用しているものすべてにつくが、特にフンドシを一番好むようだ。縫い目あたりに何千となく卵を生みつけるので対策の手がない。

シラミとしては、垢だらけの顔、手、足、不潔な衣類などすべてに居心地がよいのである。

顔は、十日に一回ぐらい、飯盆に雪を入れ枕元において体温で解けて水になる。それを湯茶がわりに飲んだり、顔や手、足をふいたものである。(今でも、シラミの卵がついた当時の防寒袴下を記念に所持している。)

苦勞して自分の墓穴を掘る

砂丘の東に面した小高い所を選び、ノルマー一日一人で当所は一か所の穴を掘らされた。幅は六十センチ、長さ二百センチ、深さ七十センチおよその穴を連日掘り続けさせられ、それはやがて俺達が入るであろう墓穴だった。その墓穴は整然と列を作って出来あがってゆく。モンゴルの雪は消えても、地下七十センチはまだ固く凍って、一日一か所掘るのが容易ではなかった。

かつて私が入隊当時、大砲の設営の穴、戦車壕の穴

掘りで鍛えた腕だが、栄養失調ではとてもノルマの達成が重労働だった。また道具は日本の今ごろ子供のおもちやのスコップがあるが、小さい四角の鉄板のヘラのようなもので、それだけで掘るのだから思うように掘ることができなかった。

その墓穴は、すぐ使われだした。ある日の夕暮、食糧のパンを積んだトラックの片側に、腹部に何かロシア語で文字が書かれた、内臓を摘出された死体が何体か積まれてきた。それは勿論間違いない日本人だ。

それを毛布にくるみ四人で担ぎ、丁寧にその墓穴に埋葬した。やがて自分も、自分で掘ったこの墓穴に入り、内地や、親、兄弟の夢を見ながら永眠するののかと思うと、さしずめこの墓穴は私の第二の故郷といえなくもない。

その穴掘り作業を指揮した班長は、死体処理も任務であったが、一か月ぐらいで今で言うノイローゼにかかって倒れた。

五月に入っても墓穴が掘り続けられ、砂丘は一大墓地となった。

その数はモンゴルに入ってから、このホジルボランの近郊にいる部隊の、死者の数であったろう。

四月半ばに、ソ連国境からここまで来る途中に倒れた戦友は、一時仮埋葬してあったのを掘り起し、埋葬する作業が一週間ぐらい続けられた。

雪を払って、鉄棒で死体を捜す。死体は冷凍人間だ、軍服を着て階級と胸に名札をつけてよくわかり、重なり合って出る死体は、不動の姿勢であった。

鉄棒の先が腹に刺さることがあっても、何も感じなくなつた。いづれ早いのか、おそいか明日は我が身である。今埋め替えされることは、せめてもの死者への供養であると感じた。土をかけ埋葬し、その頭の上には日本語と、モンゴル語の氏名を記した、墓標が建てられた。合掌

故郷の夢を見る

亡き母は恋しい

いづこにおられるや。

飯盒一杯の湯で入浴

收容所から約二キロぐらゐの小山の奥に、小川のよ

うな水の湧く井戸を発見した。炊事用には、その水を利用した。駱駝に車を引かせドラム缶を積んでそれに汲みあげて運んだ。そのうち収容所の近くにドラム缶を据付け、バラックの浴場小屋を建てた。

その水と、雪を解かして入浴をと目論んだが、燃料の都合でドラム缶風呂にはついぞ入れずじまいだった。風呂場の床は凍りついていたが、裸になって、飯盒一杯の自分の温度と同じぐらいの温度の湯を使い、身体全体を存分に洗うと、自然に身体が暖まって最高の気分であった。

今はよく温泉にも行くが、あの時の気分にはほど遠いものがある。それも一か月に二回ぐらいであったが、楽しい入浴であった。五月は、日本の東北の三月頃のような気候であるが、それでも夜は一段と寒く、健康には注意したものである。この間交替で何人か使役にかり出されるが、行き先は収容所から三キロぐらい離れた所の大きな工場の清掃作業であった。

週番将校が撃たれる

よく食糧が、欠配することがあって、隊員たちが一

様に食べ物にガツガツしていた。収容所から一キロぐらい離れた所に、仮りの食糧置場があったが、二、三回その置場から食糧を掻っ払いに成功した不心得者がいたようで、それを知ったモンゴル兵の歩哨の警戒は厳しくなっていた。

夜便所に出るにも、収容所から便所まで約三十メートルを銃剣で「ダワイ、ダワイ」（早く、早く）と追いまくられ、銃剣で尻を傷つけられた者が出るほどだった。そんな毎夜だったが。

ある朝、いたましい事件が発生した。それは週番士官がモンゴル兵に撃たれたことである。

我々抑留者も団体生活の規律を維持するため、旧陸軍の階級で統率していた。夜は不寝番兵と週番将校を配置していた。それは、モンゴル兵も了解済みのことである。さて、収容所前の出口付近で週番将校がモンゴルの歩哨によって銃で射殺された。食糧の盗難事件等も多分尾を引いておったと思う。簡単に逃亡者と見誤つての射殺であるという片付けられてしまった。我々には、この事件は何んとも理解し難いでき

ごとと今でも思っている。

勝てば官軍の例えのとおり、戦争に負けたものは何を言ってもだめだったかも。情けない全く悲惨なできごとであった。合掌

故 甲斐明 (福岡県出身)

ホジルボラン、墓地番号「一七四」

本格的な労働作業に取組む

昭和二十一年六月十七日

モンゴルの六月は、草原の凍りも徐々に解けて、遊牧民の活動がこれからが本番となる。朝夕はまだ冷たいが、日中はいくらか暖かさを増し、日本の春一番のような季節である。

凍りつく厳冬の半地下収容所から外に出て眺める丘には、鳴き兔が、我が意を解したように同じ地下から出て首をあげ、キュッ、キュッとあたりを眺め鳴くさまは、春風駘蕩正に心に春を感じさせるに充分であった。

厳しい冬から解放され、ここちよい陽氣を迎えても、いつ生きて日本に帰れるか、そのことのみが片時も脳

裏から離れない。

冬の間地下の収容所にもぐっていた我々に、春の陽気とともに、本格的な労働の煉瓦造りの「ノルマ」が待っていた。

国営の煉瓦工場に連れていかれた。煉瓦は、造って、日干しして、それを冬期にかまどで焼き上げて製品とするが、造るには先ず用土を掘り出す、断崖の下を掘り下げ、石のない粘土(用土)を採取し、篩(ふるい)にかけ、それを平地まで運び上げ、水を入れよく練り合わせたものを、ダンゴにして型の木箱に投げ入れて、それを砂をまいた平らな所に持って行ってあいまよくひっくりかえす、そして箱を取り上げうまく出来ればよいが、なかなかどうして、うまくはできない、ろくな食事も与えられない、栄養失調の身での煉瓦造りは大変な重労働であった。

用土を掘り出す、篩にかける、運搬するだけでも午後までかかる。その用土を小山のように積んで、真中に穴をあけ水を入れ足で踏んで練り合わせる、よく練り合わせないとよいダンゴができない、練るのに足で

踏むが、子供の頃わが家で「ミソ」を造るとき大豆をよく煮てそれを大きい樽に入れ「ワラジ」をはいて足で踏んで、ねりつぶしてミソ玉を造った。

そんな感じで用土を練る、小さい用土の山に一時間もかかる、それを大きいダンゴの一つ造っては型箱に入れる。力よく入れないと箱のすみによく入らない、箱は二個入るようになっていて、そしてひっくりかえして矩形の煉瓦の生ができるが、そううまくいかない。

それを並べる、二列となる、一日の「ノルマ」は一人二十個であったが、三十個にと増やされた。

「ノルマ」を達成しないと夕方まで宿舎に帰れない。できた組は、できない組を応援しその達成を支援した。夕方暗くなると、今度はモンゴルの歩哨が、早く帰りたいのでやたらと銃剣をチラツかせ、ダワイ、ダワイと怒鳴りつけるのだった。

日が暮れば、寒さも増して仕事の中々はかどらない。月の光をかりてやっと達成し、収容所に午後九時頃辿り着く日もあった。

待っている夕食は、大豆の煮たもの湯飲み茶碗一杯

ぐらいである。

たまに米が少し入ることもあったが、空き腹に食べても、食べたような気がしない。毎日腹が空きっぱなしである。古里の食いものを頭に浮かべ、空腹を我慢するよりしか方法がなかった。残酷な話としか言いようがない。

牛糞と駱駝らくだの死体

そんな労働の中でも、十日ぐらいに一度交替で休みがあった。しかし、休みとはいえ、炊事用の燃料集めにかり出されるのである。

燃料は「薪」でなく、牛糞か、駱駝の糞である。砂漠の原野であるため春は非常に乾燥する。牛や駱駝の糞はからからに乾き、バカバカとなって臭いもない、きれいなものである。原住民も古来から貴重な燃料として使っている。

背中に籠を負い、それに熊手のようなもので拾い集め、炊事用の燃料とした。

木片などに火をつけ、乾いた糞をその上におくと、日本の木炭のような燠あつ（おき）になって、かなり熱カ

ロリーも高く、いつまでも赤々と相당한時間燃えるから、砂漠の燃料として、全くうまくできているものだった。

いつかその牛糞拾いに出かけた時である。頭の中と目は、つねに食い物しか考えていない。何か食べ物がなくと探している。そうしたうちによいものを見つけた。

それは駱駝の死体だった。病気が事故死かなどは考えてもいない。勿論初めての体験である。その死体の状態からみて、誰となく、首が長いから長い食道の軟骨部分なら食べられそうだとのこと、早速その軟骨を引っぱり出した。まだあまり腐ってはいなかったので、小刀で切り取り、それぞれ持ち帰ることとした。野原に火を焚いたらモンゴル兵にいきなり撃たれて死ぬかと考えたものだった。

以前に射殺事件のあった収容所の取りこわし作業に当たった者が、焼け残った残り火のあるのを見つけたので、そこに駱駝の食道の切れ肉を持って集まり、焼いて見ると全くヤキトリの「もつ」と同じように美味で、

皆よろこんで久し振りのご馳走にありついた。充分栄養を補給し、あとはポケットに入れて持ち帰った。

このときばかりは、皆駱駝様の死体に手を合わせ拝んだ。

女軍属と「バピロス」(タバコ)

煉瓦造りは、かなりの労働力を必要とし、作業工程は簡単なようであるが、熟練を要するので、初めからうまくはできないのだ。

そんなある日、いつものとおり土を、我々が苦心して造った、一輪車で上に運び上げる作業の午後だった。六月とはいえ、日本の四月ごろの気温より低い温度の日で、しかも午後のことで身体も疲労し、思うように働けない。

少し身体を休めようとうずくまって焚火で暖をとっていたら、女看視の軍属が土手から見ていたものか「ハワイ、アベ」といって、いきなりスコップを投げてきた。

これが足に当たり、いくらか痛みを感じた。これは女看視が、阿部が労働をサボっていたので、皆にいま

しめたのだった。と、私はこれを逆にデッチ上げ、次のようにソ連軍の憲兵(ゲ・ペ・ウ)に訴えた。「私は、一生懸命ノルマを達成しようと頑張った。突然、腹が痛くなったので、ちよつと休んでいた。

そこにスコップが飛んできて足に当たり、痛くて歩行も充分できない。」と言った。それは事件のあった日から三日あつた。特別にソ連兵の詰所に呼び出され、事実を聞かれたのは当然のことである。

そんなことがあつて十日ぐらいたつたある日、突然例の女看視(モンゴル人)が、作業中の私を呼び出し、事件当日の行動をあやまつて、よくいろいろなことを話してくれた。

日本語が達者で、話の中に東京、京都が出たり、特に盛岡の地名が出た。盛岡駅前には橋があつた。あの川は何んと言う名だつたか、と云つた具合であつた。

盛岡に実際にきたことがあるのか、日本をよく勉強したのかは定かでない。

小説のドラマなら、さしずめ日本女性が敵国に身を売つて、高官の女軍属となり、スパイ活動というスト

ーリーになるかも。

それを想像させるほど、流暢な日本語で、年齢は十二、三歳ぐらいとみられた。勿論、スタイルも抜群、栄養失調の身でなかつたら、敵国の女性とは云え、仲よくし、積極性さえ發揮すれば、あるいは恋も芽ばえたかもしれない。

いずれ、そんなことがあつてからその女看視員が来るたび、タバコを有り難く頂戴することになった。それは「ハピロス」と言つて吸い口の紙の部分は約七センチぐらい、計十センチぐらいの長いタバコであつた。半地下の収容所の広い場所で一服ふかすと、その香りが部屋のすみずみまで匂うタバコで、それを「ハピロス」と言つた。「ハピロス」とは何か、その意味はわからなかつた。

執筆者の横顔

阿部氏は、大正十二年生れ、岩手県紫波郡赤石村出身で、現在は紫波町北日詰に居住している。

青年時代に、実業専門学校を卒業し、習得した電信工学を生涯かけて、近代的な感覚を学びとり社会に貢

献した、きわめて真面目に公共事業に燃えつくした、東北人としての規範とする人物であろう。

彼は、専門学校を卒業するや、満州電々公社に採用されて渡満された若き日の決断があっばれである。

満州国の発展は世界の驚異とされたことは、電々公社の事業が急速に全満に伸張したこと、中央銀行の金融整備が貨幣制度に伴い全満にゆきわたった活躍によって、新興満州の産業文化を物すこい勢いで発展させたものである。

ここに着目した若き日の阿部氏の慧眼があつた。

昭和十五年、新京の電々公社の社員養成所に入所以来、同五十九年六月まで四十五年の長きにわたり満州と日本の両電々公社に精励された貢献は多とする。

勿論、その間、関東軍の東寧重砲満州第三九〇部隊や旅順幹部教育隊等に入隊し、ひいてはソ連軍から捕虜となつてモンゴル収容所に入れられた四年間は公社休職期間となつてゐる。

されど、モンゴルの日本軍人捕虜収容所での苦労は、零下四十度の酷暑と言うより酷凍、冷凍の不毛の地で

強制労働を強いられた惨害に、一日一食か二食、しかも黒パン一片でしのいで生き耐えてこられた、栄養失調、病氣、凍傷等で毎日死人運搬、埋葬の穴ほり作業、同僚を埋葬しながら、明日はわが身と笑いながら穴掘りした阿部氏である。しかし生きて引揚げられたのはいかなる死に直面しても大きな口を開いて笑えた度量、根性そしてユーモアを飛ばす心の余裕があつたればこそであろう。

ともあれ、満州電々公社の社訓は民族協和の権化のような方針で満州国文化向上に至大な貢献をした公社である、阿部氏はこの公社の社訓を体して外地生活を貫いた貴重な体験を経て、二十二年に復員できた。

そして、翌二十二年に盛岡郵便局電信課に採用され、ひいては日本電々公社岩手電気通信部に、同五十七年定年退職まで精励された。

人に信用される人物たれとのモットーを貫いた阿部氏のこれからの健闘を祈る。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助